

ブラームス：弦楽五重奏曲 第2番

弦楽四重奏にヴィオラを加えた編成はモーツァルト「弦五」の直系。北ドイツ的な逞しさよりも、ウィーンへの恋情を感じさせてくれる。それとともに都会人の孤独、憂愁も聴きとれる。第1楽章はソナタ形式のアレグロ。キラキラと光を反射するさざ波のような伴奏音型に乗って、チェロが雄渾なメロディを奏でる。5番目の交響曲となるはずだった素材を使っているという説もあり、スケールの大きさに圧倒される。2本のヴィオラで歌われる第2主題は、明るく軽やかでゴンドラの舟歌のよう。しゃれたウィーンの小唄もあれば、R.シュトラウスを想わせる華麗な響きを聴くこともできる。熟練の作曲技法をつぎ込んだ楽章だ。第2楽章はアダージョの変奏曲。ヴィオラが憂鬱な歌を奏でる。途中で激情の嵐に見舞われるが、沈鬱なムードは変わらない。美しく、ほろ苦い音楽。第3楽章はレントラー風のアレグレット。哀愁をたたえた魅惑のメロディをヴァイオリンが歌う。ト短調がト長調に変わるトリオでは、ヴィオラとヴァイオリンそれぞれの二重奏が軽やかに歌い交わす。ハンガリー舞曲への愛情が全開となる第4楽章はロンド・ソナタ形式。ヴィオラが奏でるテーマは“憂愁の調”であるロ短調だが、ヴァイオリンが加わるとすぐにト長調に。弦楽器の難技巧が次々と繰り出され、全員が無心で弾きまくる。そして、頻出するシンコペーション。チャールダーシュ風のコードが現れて、一気呵成に曲を閉じる。

ブラームス：ピアノ四重奏曲 第2番

ブラームスの室内楽曲のなかでも屈指の規模を誇る。第1番と並行して書かれたが、本作は明るい曲調を特徴としている。第1楽章はソナタ形式のアレグロ。ラップ信号のようなリズムカルな音型でピアノが歌い始める。弦の伴奏によって雄渾な第2主題を弾き始めるのもピアノだ。起伏が大きく、濃淡の激しい展開部が続く。第2楽章はロンド形式のアダージョ。弱音器をつけた弦楽器とピアノによる2つの旋律が美しく絡み合う。呟くように語り言をいうチェロをピアノが威圧すると、メロディの饗宴が始まる。まるで連作歌曲を聴いているようだ。悲恋の嘆き歌、舞踏会のワルツの調べ、清冽な賛歌……全てが主題の変奏による。痛切に高揚したのち、呟くように終わる。第3楽章はアレグロの長大なスケルツォ。スケルツォ部、トリオ部それぞれが展開部をもつソナタ形式で書かれている。まず弦楽器、ピアノそれぞれがテーマを奏でる。どちらも穏やかだが、展開部では激しく昂ぶる。トリオでは堂々とした重々しい踊りと、鄙びた歌がカノン風に絡み合う。第4楽章はロンド・ソナタ形式のアレグロ。この約7年後、「スラヴ舞曲集」を出版して大ヒットを飛ばすブラームスの面目躍如たる楽章で、活気に満ちたハンガリー風のメロディが駆け回る。最後はピアノと弦楽器が競り合うようにロンド主題を奏でて勇壮に曲を閉じる。